

「嗟う分身」 ★★★

2014 (平成26) 年11月15日鑑賞く
シネ・リーブル梅田>

監督：リチャード・アイオアディ

脚本：リチャード・アイオアディ、アビ・コリン

原作：フョードル・ドストエフスキー『分身(二重人格)』(岩波文庫刊アイゼンバー
サイモン・ジェームズ(内気で要領が悪い会社員)]グ

ジェームズ・サイモン(要領が良く、自信家の期待の新人会社員)

ハナ(サイモンが思いを寄せるコピー係) /ミア・ワシコウスカ

パパドプロス(サイモンの上司) /ウォーレス・ショーン

ハリス/ノア・テイラー

メラニー/ヤスミン・ペイジ

キキ/キャシー・モリアーティ

“大佐”(サイモンが勤める会社のボス) /ジェームズ・フォックス

2013年・イギリス映画・93分

配給/エスパース・サロウ

◆この世に、自分と同じ人間が・・・? そんな小説や映画は多いが、ポルトガル唯一のノーベル文学賞作家ジョゼ・サラマーゴが2002年に発表した長編小説『複製された男』を原作とした『複製された男』(13年)は、邦題だけではなく、『ENEMY』という原題からも読み解く必要がある映画だった。つまり、後半からクライマックスにかけては同じ顔を持った者同士が「敵対者」として互いの女に・・・(『シネマルーム33』275頁参照)。

他方、『THE DOUBLE』を原題とする本作は、ロシアの文豪ドストエフスキーの初期の作品『分身』(1846年)を映画化したもの。そこでは顔も姿かたちも全く同じだが、内気で要領が悪い男サイモン・ジェームズ(ジェシー・アイゼンバーグ)と要領が良く、自信家の男ジェームズ・サイモン(ジェシー・アイゼンバーグ)という、性格が正反対の2人の男が登場する。職場ではサイモンは勤続7年、ジェームズは新人だから、サイモンの方が圧倒的に優位にあるはずだが、さまざまな能力差を見ると、さて、その優位はいつまで・・・?

◆私はドストエフスキーの『罪と罰』(1866年)や『カラマーゾフの兄弟』(1880年)という「大作」は大好きだが、前述した『分身』や『地下室の手記』(1864年)等の(短編)小説は、多少変質狂的なところがあり(?)わかりにくい。もっとも、本作は、ある日自分そっくりの人間が登場してくることによって混乱が始まるという「分身」のテーマを生かしているだけで、舞台設定や登場人物は原作を大きく変えている。

『ソーシャル・ネットワーク』(10年)は世界最大の「ソーシャル・ネットワーキング・サービス、フェイスブック」を世の中に送り出したアメリカの3人の若者を描いた(『シネマルーム26』18頁参照)が、その主人公を演じたジェシー・アイゼンバーグが、本作ではサイモンとジェームズの一人二役で出演している。『ソーシャル・ネットワーク』では早口で機関銃のようにしゃべりまくる姿が印象的だったが、本作前半では会社の同僚の若い女性ハナ(ミア・ワシコウスカ)に想いを寄せながら告白すらできない、内気で暗い男サイモンを実にうまく演じている。

◆サイモンが勤務している会社は情報処理システムを開発する会社のようなのだが、まず注目すべきは、そこで使われているバカでかいコピー機。次に、この会社を支配しているのは“大佐”(ジェームズ・フォックス)と呼ばれる男だが、社員に対する厳しい管理体制をみていると、まるで資本主義が始まった時代の「女工哀史」のようなハチャメチャさだ。一体これはいつの時代で、どこの世界? そんな設定からして本作は不条理で気味が悪いが、ストーリーはそれに加えてワケがわからないつくり・・・?

さらに、今ドキの若い人は「ジューク・ボックス」と言われても何のコトかわからないだろうが、これは大きな箱の中にレコードが入っていて(?)お金を入れて曲を選べば、それが演奏される魔法の箱だ。本作の中でそんな「ジューク・ボックス」から流れてくる曲は、何と九ちゃんこと坂本九の名曲『上を向いて歩こう』(63年)やグループサウンドの名曲中の名曲である『ブルー・シャトウ』(67年)だ。こりゃ一体ナニ? 『上を向いて歩こう』は『SUKIYAKI』として世界的に有名になったからいいが、『ブルー・シャトウ』を知っている外国人は一体どれくらいいるの? こんな勝手な(?)演出はあくまでリチャード・アイオアディ監督の趣味であり、リチャード監督のお遊び・・・?

◆「覗き」は犯罪だが、ヒッチコックの『裏窓』(54年)や、その若者版、IT版ともいうべき『ディスタピア』(07年)(『シネマルーム16』436頁参照)には、カメラの望遠レンズを使って裏窓から見る隣のアパートの住人達の人間模様を観察する(覗く)シーンが登場する。それと同じように、サイモンのお楽しみも、夜な夜なやっているハナの部屋の覗きだが、ある日瞬間的に目に入ってきたのは、自分とそっくりな男が手を振って「さよなら」を告げるかのように身投げするかの姿だ。これは、一体ナニ・・・?

他方、本作後半からは、新人のくせに何かと要領が良く、したがって、上司からのウケも良い自信家の男ジェームズが、何かとサイモンの目の上のたんこぶとなるシーンが登場する。しかし、会社のボスである“大佐”をはじめ、社員たちはどうして姿かたちが俺と全く同じ人間と一緒に働いていることに気づかないの? また、それに違和感を訴えないの? しかも、あいつが入ってきてから、あいつは俺がなかなか声もかけることもできなかったハナに対して親しげに声をかけているようだし、ひょっとしてデートも・・・。

本作は93分と比較的短いですが、後半はそんなシーンばかりが続いていくので、サイモン自身はもとより、観客もサイモンのことを心配していくが、さて・・・。

◆ジェームズだけが自分の姿かたちがサイモンとそっくりであることを認識していることは、次第にジェームズに対して、「替え玉スイッチ」を強要し始めたことから明らかだ。これは、さすが知患者のジェームズのアイディアらしく、時と場合によって2人が入れ替わることによって、その場をうまくこなしていこうというものだが、それで得をするのか、ジェームズばかりではちょっと不公平・・・。このままでは、サイモンはハナをとられてしまうだけでなく、自分の存在そのものもジェームズに乗っ取られてしまうのでは・・・?

そんな恐怖感が出てきたのは当然だが、さてそこからクライマックスに至る摩訶不思議な展開は? その意味は、実は私自身もよく分かっていないので、あなた自身の目でしっかり確認を! それにしても、ワケの分からん映画だったなあ。それが、私の正直な感想だが・・・。